【 17 】

氏　　名　佐藤廉也（さとうれんや）
学位(専攻分野)　博　士（文　学）
学位記番号　文博第132号
学位授与の日付　平成11年3月23日
学位授与の要件　学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻　文学研究科行動文化学専攻
学位論文題目　北東アフリカにおける焼畑農耕社会とその変化に関する研究

論文調査委員　（主査）教授 石原　潤　教授 成田孝三　教授 金田章裕

## 論文内容の要旨

本研究は，北東アフリカの熱帯森林地域における焼畑農耕社会を対象として，(1)熱帯森林環境における焼畑農耕の時空間的・技術的特性を，当該社会に生きる人々の合理性という視点を導入しつつ明らかにすること，(2)焼畑農耕システムにおいて最も重要な特徴と指摘されつつ実証研究がきわめて希であった，長期の移動・休閑サイクルを含む「焼畑農耕の時間的スケール」の重層性を実証的に明らかにすること，さらに(3)現代の焼畑社会が普遍的に直面する急激な変動を，国家・民族間関係，あるいは中央・周辺関係という現代史的な文脈においてとらえること，を目的とする。

これらの目的を達成するため，論者はきわめてインテンシブな長期的定点観察という方法を試みた。対象は，エチオピア南西部の森林地域において焼畑農耕を中心に，ハチミツ採集，狩猟や植物採集活動などの生業を営むスルマ系民族集団（マジャンギル）である。エチオピアは，アフリカ諸国の中で欧米列強による植民地化を免れた例外的な国家である。アフリカの多くの生業社会が植民地下に大きな変化を経験する一方，エチオピアの辺境社会は相対的に民族社会の自律性を保持してきた。ところが1974年のエチオピア社会主義革命以降，国家という近代的制度に組み込まれ，緊密な相互関係を余儀なくされることになった。したがって，伝統的焼畑システムが比較的近年まで維持されてきたと同時に，現在急激な社会変化を経験しているという点で，アフリカの焼畑社会の中でも特異性を持っている。それはまた，本研究の目的にとって，きわめて魅力的な地域である。

マジャンギルの過去を記録する唯一のまとまった文献は，人類学者ジャック・スタウダーによる民族誌と，マジャンギル居住域でミッション活動をおこなったハーベイ・ホエクストラの自伝的著書である。いずれも1960年代のマジャンギルの生活状況を記録している。ところが，社会主義政権以降の記録に関しては，断片的なものを除いてほとんど見あたらない。ごうした状況を克服するために，論者は，村人の行動観察・耕地の簡易測量による実測・空中写真分析・歴史意識や口頭伝承の聞き取り・植生調査・居住域内の広域的な踏査など，利用可能なあらゆるデータを収集し，それらを比較可能な形に加工し分析を加えることによって，焼畑農耕における空間と時間の構造を総合的に明らかにすることをめざした。

焼畑研究に関しては多彩な分野から層の厚い研究蓄積がみられる。とりわけ，環境問題が現代世界の最重要課題と認識されるようになった近年，焼畑農耕をテーマとする研究報告は年々増加しているといってよい。本研究の議論をすすめるにあたって，まずこれらの研究動向を整理し，課題を鮮明にする必要がある。そうした研究蓄積は，コンクリン，コンドミナス，フリーマン，シュリッペなど1950年代にあらわれた文化人類学における成果に触発され，彼らの提示した問題設定にその多くを負っているといえる。第一章ではこうした点を考慮しつつ，論者はとりわけ近年に注目されるにいたつた問題群に焦点をあてる。すなわち，「地域環境・技術・経済の相互関係」，「環境変化とのかかわり」，「市場経済化や政治経済状況に伴う焼畑システムの変化」という3つの流れに沿って整理をおこなっている。その過程で，本研究でなぜ冒頭に示したような目的を設定したかが，明らかにされている。

第二章では，目的(1)に関連する「熱帯森林環境における焼畑農耕の時空間的・技術的特性」に関する議論をおこなってい

る。環境への適応システムとして焼畑農耕を理解する研究視点は，これまでも多くの研究事例がみられるが，論者の強調点は，環境と技術の関係に，在来社会の経済的合理性というファクターを導入して理解しようとする点にある。このように考えるのは，環境・技術・経済という３つのファクターは互いに不可分に結びついていると論者は考えるからである。こうした考え方に基づいて，マジャンギルの焼畑システムを耕地や作物の空間配置の特徴や季節推移という側面から記述しつつ，それらが労働生産性という観点からどういう意味をもっているかを検討した。その結果，熱帯森林環境という環境の枠内でマジャンギル焼畑システムの持つ意味が，危険分散という点から理解できることが示された。

続く第三章では，第二章で議論した環境・技術・経済の関係が，実際の環境の動態に応じてどのように機能しているかを，複数年にわたる観察を基にして検証している。特にサバンナ環境と比較したとき，湿潤熱帯の森林環境の大きな特徴は，季節リズムが曖昧な点である。1992年から６年にわたって定点観察を続けてきた論者は，年ごとに乾季の長さや雨量，乾季と雨季の境目が大きく変動する事態をみてきた。こうした自然環境の不確実な様態は，通常の焼畑システムにとって，大きな不都合を生じさせる。火入れが思うようにできるか，播種後に雨が十分降るかといった点が，作物の収量に大きく影響するからである。論者は，こうした熱帯林に特有の制限要因に対して，マジャンギルの人びとが柔軟に対応し，結果として安定的な生計を持続していることを明らかにした。

第四章では，視点をより長い時間的スパンに転じて，(2)に述べた「時間的スケールの重層性」というテーマを扱う。これは焼畑農耕の休閑サイクルの実証という問題に直接的に関わっており，その意味で本研究の中心的な位置づけを持つ。論者は，焼畑の農耕システムとしての本質が耕作・休閑のコンビネーションにあるということを，第一章で先行研究を参照しつつ明示したが，多くの焼畑研究は，現代の焼畑社会では，人口圧の高まりに伴って休閑サイクルが短期化し，焼畑システムの崩壊を招き，環境破壊へとつながっていくという図式を半ば前提化している。ところが現実の焼畑休閑サイクルは長期にわたるものであるため，そうした休閑の実証研究を意図する数少ない研究例をみても，短期的な観察から長期的な環境変化を予測するというものがほとんどである。本研究はこうした状況に対して疑問を投げかけ，将来の研究方向に一つの突破口を示すことを目指している。方法としては前述のような多様なアプローチの併用によって，目的の達成を目指している。

第四章で論者は環境変化の復原を通して，マジャンギル社会が今世紀後半に経験した社会変化にもふれており，そうした変化は，外部の政治経済状況に対して，集落形態や焼畑システムを適応的に変化させたということができるとする。では，そうした適応的変化はいかにして推進することができるのだろうか。ここに，これらのプロセスを焼畑社会内部の動きから考察する必要性が生じる。マジャンギル社会の現代史をたどると，キリスト教受容という現象が，集住村落化の過程で浸透していったことがわかる。キリスト教受容のきっかけになったのは，アメリカの長老教会系ミッションが1964年からマジャンギルにターゲットをしぼった活動をはじめたことである。ところが，キリスト教が浸透したのは，ミッションが活動していた当時よりもむしろ，社会主義革命に伴って彼らが国外退去になった後のことである。集住村落化の過程と時を同じくして，マジャンギル自身の手によって受容が推進されたことから，キリスト教受容がマジャンギルにとって，集住村落化と密接に関わる性質を持ち，集住化への適応に深くかかわっていると論者は予想する。こうした理由から，第五章では焼畑そのものからいったん離れてキリスト教受容のプロセスを集住化以降の現代史の流れと対応させながら記述し，そこからマジャンギル焼畑社会の動態のメカニズムを把握することが目指されている。

さらに論者は，キリスト教受容と集住村落化のプロセスをみていくと，マジャンギル社会の動態は国家や民族間関係のみならず，マジャンギル社会内部の伝統的な社会関係を基に把握する必要があるとする。とくに重要な鍵を握っているのが，クラン関係と世代間関係である。キリスト教受容過程で普及運動を担ったのは，ミッションによる教育を受けた若い世代のマジャンギルたちだったが，彼らの多くは，伝統的宗教権威者であるタパの子弟たちであった。タパを親に持つ彼らがかえって人びとに改宗をすすめた理由は，彼らが次代のリーダーシップをとるべき位置にあったからであろうと論者は推測する。第六章で論者は，この点を明らかにするために，集住化過程で中心的役割を果たしたメラニール・クランの一人のリーダーの語り（ライフ・ヒストリー叙述）の分析に焦点をあて，その歴史意識を明らかにした。この分析を通じて論者は，マジャンギル現代史の動態を把握する手がかりが浮かび上がってきたと考えている。

以上のように，第五・六章は，目的(3)「現代の焼畑社会が直面する急激な変動を現代史的な文脈でとらえる」試みとなっている。

## 論文審査の結果の要旨

焼畑農耕ないし焼畑農耕民社会については，既に膨大な量の研究の蓄積があるが，既往の研究をもってしても，(1)焼畑農耕技術の農耕民自身にとっての経済的合理性についての検討は不十分であり，(2)焼畑の休閑・移動に関する長期のタイムスパンでの研究は少なく，(3)生態研究と歴史研究を結びつける形で焼畑社会の変動を解明することもほとんど行われていない。その理由は，これらの課題の究明のためには，極めて長期の参与観察が必要であり，また史・資料に乏しい焼畑社会の過去の復原には著しい困難が伴うからである。

本論文は，エチオピア南西部熱帯樹林地帯に住む焼畑農耕民マジャンギルを事例とし，以上のような困難な課題に対して，正面から取り組んだ意欲的研究であり，６章から構成される。論者は，最長21ヶ月の連続した参与観察を含む，６カ年間に亘る現地調査を実施し，焼畑農耕及び農耕民の現状については，村人の行動観察・耕地の実測・植生調査・広域の踏査等によりこれを明らかにし，また過去の復原については，古い空中写真や地形図の分析・口頭伝承やライフ・ヒストリーの聞き取り等，さまざまな方法の併用によりそれを試みた。

第一章では，多数の文献の渉猟に基づき，焼畑農耕研究史，特に70年代以降の新たな動向の整理と，本研究の課題の導出とが行われる。まず，焼畑農耕の定義として，「焼く」ことよりも，耕作と休閑のコンビネーションを重視する近年の見解に賛同し，特にサバンナに比べ季節リズムがはっきりしない湿潤熱帯における，自然環境の不確実性に対処する技術としてのスラッシュ・マルチ耕作（火入れを行わない焼畑）に注目する。次に，焼畑用地としては原生林よりも二次林の利用が一般的であり，焼畑耕作が灌漑稲作に比べても労働生産性において優れているという近年の知見を紹介する。また，環境劣化を焼畑に帰するのは誤りであることが多く，近年のギャップ・ダイナミックス論によれば，焼畑がむしろ森林更新に貢献している可能性もあるとし，長期のタイム・スパンで休閑や移動性を調査する必要性，さらに，近年の政府による定住化政策や市場へのアクセスが，在来経済との不整合を起こし環境劣化を結果する可能性を指摘し，生態研究と歴史的研究を結びつけた研究の必要性を主張する。冒頭に掲げた本研究の三つの課題は，このようにして導出されたものである。

第二章では，マジャンギルの一村落におけるインテンシブな観察に基づき，その焼畑農耕の技術的特徴や労働の季節的配分を検討することを通じて，焼畑農耕の住民にとっての経済合理性を見事に明らかにしている。すなわち，当農耕においては，①主食作物が多様であり，②それに対応する耕地タイプも時・空間的に多様であり，それらを通じて，③労働の省力化とその配分の分散化がはかられ，かつリスクの回避がはかられているとする。その際，鍵となるのは，①乾季に伐採・火入れする主焼畑の他に，雨季にスラッシュ・マルチ耕作を行うことによる労働のピークの平準化であり，②主焼畑を二次林で行い，雨季畑には早熟種を導入することによる除草労働の省略である。

第三章では，マジャンギル村落における複数年にわたる観察により，焼畑農耕におけるリスク回避がいかに行われるかを実証している。対象地域では，１年はごく短い乾季と長い雨季とからなるが，乾季の長さ，乾季における降水量，及び雨季の開始時期については，年変動が極めて著しい。マジャンギルは，このような予測不可能な変動に対して，主焼畑の火入れ率や，雨季畑の作付量の微妙な調整によって，巧みに対応しているとする。これは，複数年にわたる定点観察により初めて明かにされえた成果である。

第四章では，長期に亘る土地利用変化と集住化の問題が扱われる。対象地域では，かつて伝統的儀礼のエキスパートたるタパを慕って焼畑農耕民がある程度集住する現象が見られた。論者は，ヌタウダーの先行研究や聞き取り調査により，このような村落とその周りの耕地がタパの死後放棄され，住民が移動・分散化する現象が繰り返されて来たと推測する。そしてこのような移動の繰り返しが，土地利用の数十年単位の長期サイクルとして存在した可能性を主張する。加えて論者は，1960年代の空中写真，1980年代の地形図，及び論者自身による地上計測をもとに，30年間の土地利用変化をメッシュ・マップ化して比較考察し，メンギスツ軍事社会主義政権下に行われた「集住村落化」の実際をも巧みに実証している。

第五章では，マジャンギル社会の近年におけるもう一つの大きな変化としてのキリスト教の受容が，いかに行われたかを検討している。布教活動は1960年代中葉からアメリカ人宣教師によって行われたが，受容が進むのは，むしろメンギスツ政権により宣教師が追放されて以後，宣教師の教えを受けたメラニール・クラン（かつてタパを輩出したクラン）の若者達の布教活動によるものであった。論者は，布教活動者の村人達への演説を分析することにより，キリスト教の受容が，集住村

落化・学校誘致・将来の豊かさの保証などと結びつけて説かれているとし，このことから，メラニール・クランの若い世代が，外部社会からの強力なインパクトの下に，かつての信仰の対象であった精霊の力について，もはやリアリティを維持することに困難を感じ，「世界観の組み替え」によってキリスト教を選んだと言う興味深い推定を行っている。

最後に第六章では，キリスト教の布教活動とメンギスツ政権の政策の受容とに中心的役割をはたした，あるメラニール・クランの人物による「歴史の語り」の分析により，マジャンギルにおける歴史意識の生成を論じている。「語り」の中で，「昔」と「今」とを分けるモニュメントとして強調されるのはミッションの到来であり，「昔」は禍をもたらす精霊の時代，「今」は神の下での集住・西洋医薬・学校教育・禁酒・禁煙の時代とされる。論者は，これらを当人物のマジャンギル社会における立場から発するものと見る。

以上，本論文において論者は，マジャンギルの農耕と社会の特性とその変容に関して，所期の研究目的をほぼ全うし，多くの注目すべき知見をもたらした。それらは，長期の困難な現地調査と，多様な研究方法の駆使によって，初めて可能になったものであり，その成果は高く評価されるべきである。

しかしながら，本論文にも問題点がないわけではない。第一～三章で論じられた焼畑の定義や自然環境の不確実性の意味については，なお慎重な吟味が必要である。第四章で主張された土地利用の数十年単位でのサイクルの存在は，未だ仮説の域を出ていない。また，マジャンギル現代史の全貌に迫るためには，第五・六章で試みられたような一・二の人物の言説に頼るだけでは不十分である。さらに，先行研究であるスタウダーの業績に対する徹底的な批判の上に立った，論者自身のマジャンギル社会論の体系的提示がなされるべきである。とはいえ，これらの点は，論者が今後克服すべき課題と言うべきであり，本論文の価値自体を損なうものではない。今後，論者の成果が，国際的な場で評価されることを期待したい。

以上，審査したところにより，本論文は，博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお，1999年２月25日，調査委員３名と専門委員１名が，論文内容とそれに関連した事がらについて口頭試問を行った結果，合格と認めた。